

ざわめき__いる

最 首 悟

驚くほど早く一年がめぐってくる。といって死へ一歩一歩近づいている自覚があるか、というところでもない。何かに向って歩いているという感じがしない。一つの場所の中で流れる時間だと、退屈だったり、何か夢中でやっていれば、立ち止まっているとか、どこかへ向うというふうになるのだろうが、場所を移動する、次から次に場所をずらせている、となると方向性が出てこない。どういうふうに場所をずらせているかというところ、単に「ここ」ではないというだけの話である。

一年半くらい「ここ」ではなく「そこ」へという話を隔月にやっている。地で行っているようなもので、「そこ」を定義しようとフワフワしている。「ぼくの前に道はない」に「ぼくの後には道はない」をくっつけると異様な感じになる。軌跡がなければ何者であるかの証明ができない。前を向いて後へ後退するように歩いて自分の足跡を自分で消しながら歩くと、どっちにも道はなくなるが、これはちょっと、ご苦労で、いやみな感じ。「ぼくの横に道はある」はカニの横這い。「ぼくの上に」、「ぼくの下に」。「ぼくの斜めに道はある」というのはどうだろう。なんだかよくわからない。霧やトンネルがどうしても出てくる。

トンネルは異質の世界が中ほどのところで触れ合っている。Aという世界からBという世界に行くためにトンネルをうがう。するとその通路で異質は混じわるわけだ。「混じわる」という言い方があるのかどうか。そのトンネルの長さをゼロにしてしまっただけで次から次にトンネルをくぐっていると、道はどっちにもなくなるなあ。ふりかえれば異質の世界なんだから何か見えるわけでもない。前は異質の世界なんだから何か見えるわけでもない。わたり歩いている実感は確かである。異質の世界にはそれぞれモノ・コトは充満している。ざわめきの中をわたり歩いている。そうして自分が何者でどの方向に歩いているかわからない。

鈴木秀夫の『森林の思考・砂漠の思考』の一部分がひっかかっていたのが少しずつイメージ化しているような気がする。「空」、「空の空」は「ざわめき__いる」ということで、陰陰滅滅とした無ではないということである。大辞林には、陰陰滅滅とした読経の声という例があがっているが、石牟礼道子という有髪の尼さんのお経はちがう。中世のカテドラル音楽みたいという人もいる。前とか、出発とか、よろこんで迎えられとかいうことが、「いる」ということの中に入っているとすれば、その評はあたっているところがある。少なくとも「消えて行く」という感じではない。

あるコト、モノがあると、かならずその否がある。Pがあると否Pがある。とするとあつというまに無限系列ができあがる。{P、否P}の否があるのだから

{ {P、否P}、否 {P、否P} } になる。これは果てがない。すべてのコト・モノは単独で存在することができず、Pと否Pが相い待って存在する。「と共に」、「WITH」、の世界である。そして否 { } を「空」という。さて、無限の相待集合を1つに括ろう、そして一回だけその否を行なう。一回こっきり。無限の相待集合をZとすると否Zがある。{Z、否Z}を絶待といい、否Zを「空の空」、絶待者という。絶待者も単独では存在できない。Zと相い待っているが、その相い待ちの次元がちがう。かくして、あることないことが隙間なく充満した「ざわめく__いる」が「そこ」にある。

これに対して、唯一者が創造する、とすれば終わりが出てくる。誤解はいっぱいあるかもしれないが、この「はじめ__おわり」の存在、時間の有限性は、掛け値なしのニヒリズムを生むだろう。もちろん唯一者は定義上、限りなく広がり（延長）、かぎりなくある（永遠）から、その唯一者と「はじめ__おわり」の世界に「いる」存在との関係が問題になる。直接の関係から全くの無関係、順接、逆接などなど。親鸞の絶対他力本願がこの構図のなかの逆接的無関係に極めて近いことがわかる。ドストエフスキーやキリスト教に思想的に近づく者が親鸞を取り上げる理由がわかる。だが、桶谷秀昭と吉本隆明と石牟礼道子とがそろって異様な感じになる。出水のお寺で行なわれたこの三者の親鸞講話（？）の成立と異和感がすごい。

虚無をずいぶん誤解してきた、と思う。「絶望の虚妄なること希望のそれに相い等しい」という言葉も。この言葉については誤解はもっともなところもある。同じことを西欧の誰かと、魯迅が言っている。だいぶ中身がちがうだろう。藤村操の「曰く不可解」はどうか。不可解を言い切ってしまったら、世界は開けた、実に平安である。なのに、どうして巖頭から引き返して来れなかったのか、そんな疑問がずっとあったのだが、いくぶんほぐれてきた気がする。行くも帰るも同じなのである。

霧というイメージも変って来ている。一つ一つの霧滴が、あること、ないこと、あるもの、ないものと思うと、霧の中を無方向的に一歩歩む怖さや不安は消える。そして霧はある場に「於いて」存在している。この霧は晴れることはない。「生あるものは皆この海に染まり」、水俣に初めて行って、この思いをもったことがたぶん大転回なので、それは星子が生まれたことにつながり、全共闘につながるのだが、それが確固とした歩んだ道の軌跡にならないことが目新しい。

一年はあっという間にめぐり、茫茫としているのに、「暗田は長生きするよ」と言われている。「あんた」と書こうとしたら、ワープロは「暗田」と打ち出した。これもあることないことのうち。茫茫などと気取ったむくい。